

# 子供のた

(学年は投稿時)

## 日歩さんの 豊かな表現力

### 見事な感性

コロナくん

マスクなのに

マスクはめろなんて

しかも、臨時休校で

家で自しゅくしろなんて

コロナくん、君たちのほうが

活動自しゅくしろ

コロナくんのせいで

愛する人たちが消えてゆく

コロナくんたちも

感染拡大自しゅくしろ

(鹿児島市西伊敷小6年)

茶園 日歩

#### 天声人語

宮沢賢治の童話の魅力の一つに、擬音表現がある。『やまなし』では、川底で2匹の蟹の子がこう話し始める。「クラムボンはわらったよ」「クラムボンはかぶかぶわらったよ」。あははでも、ばらばらでもなく「かぶかぶ」▼そしてやまなしの実は川に「トブン」と落ち、「ほかほか」と流れる。そんな音だけでも違う世界に連れていかれるような気がする。他の作品では、風が「どう」と吹いたり、蟬が「カンカン」と鳴いたり▼野球の球をバットの芯でとらえた音は、賢治ならどう表現しただろう。ようやく開幕したプロ野球の中継で「野球そのものの音を楽しんでください」とアナウンサーがしきりに言っていた。しばらくは無観客の試合を余儀なくされ、にぎやかな応援の音が聞こえないからだと▼150<sup>+</sup>の直球がミットに収まるときのスパーンという音は、たしかに迫力が違う。選手が走り出すと、スパイクがサクサクと音を立てる。打者の気合がウツというような声になる。テレビ観戦組には、小さなプレゼントかもしれない▼コロナは多くのものを奪ったが、そのため聞こえてきたもの、見えてきたものもある。インドの首都ニューデリーでは、経済活動が鈍化して青空が戻ったと報じられた。身の回りでも車の通行が減り、鳥の声がよく耳に入ってきたときがあった▼まもなくJリーグも、無観客で再開する。シュートを放ったときの音は。選手同士の言葉の掛け合いは。いつもよりも迫ってくるものがあるだろうか。

朝日新聞